

大槌には 五感を満たす 環境がある

「農家にならないとしても、稲のでき方、鎌の使い方を知っているだけでどこかで選択肢が増えるきっかけになるかもしれない」「すごくかわいいのは、子どもたちが作業後のおやつを『おいしい、おいしい』と夢中で食べるんです。働いた後のご飯が特別に美味しいことを知っているだけで、どれだけ人生が豊かになるだろうかとしみじみ感じます」。

地

昔は生活自体がふるさと科

平成18年、今は閉校となった小鎚小学校の時代から、農業体験の授業を行っている藤原市之助さんは、「自分たちの頃は生活そのものが今のふるさと科と同じだった」と語ります。「農繁休業というものがあり、家の仕事忙しい時、学校は休みだった。子どもの頃から当たり前前に農家の仕事を学んでいた」と藤原さん。今はそういった機会が無い子どもたちに、地域のみんなと一緒に経験を提供してあげたいと話します。



大槌には 学びの機会がある

大



昔自分たちが経験した、生きていくために必要な事を体験しておく事で、子どもたちの生きる選択肢が増える。そのために、この活動を地域で引き継いでいくという藤原さん。体験した子どもたちが大人になっても声をかけてくれ、記憶の中にあるんだなとうれしくなる、と笑顔を見せます。子どもたちはこうした地域や自然の中で、まさに全身で大槌を感じ、成長していきます。



「唯一無二」を経験する機会

10月6日(木)に行われた、「ふるさと科」の農業体験。大槌学園5年生が、小鎚地区の田んぼで稲刈りを体験しました。子どもたちは、鎌を使って稲を刈り取り、わらで束ねます。最初はなれない手つきでしたがお互いに話し合いながら上達し、みるみるスピードが上がっていききました。作業が終わると児童たちは「楽しかった。もっとやりたい」と話し、「いつも食べているご飯がこうやって作られている事を知って良かった」と目を輝かせていました。

こうした経験に巡り会うことは、子どもたちにとって人生の選択肢を増やすことにつながります。町内の小中一貫教育校で行われている「ふるさと科」では、この他にも海や山を体験したり、防災について学んだり、地域の人を講師にした得がたい学びの場を創っています。

藤原 市之助 さん

